

# 蕪村記念賞「往事馥郁」

本賞は「自由題の部」「前書俳句の部」の両部門を通じて蕪村顕彰の視点から評価する賞です。

街角に立ち尽くし

## 銀木犀帰る家問ふ紳士あり

兵庫県豊岡市

稲葉麗子

評

【塩見】 前書は往時を馥郁と想起するという意味で読めば、「紳士」は老いを背負う人物だろうか。帰る家とは、素敵な往時、すなわち現世ではなく過去へのタイムスリップを望む心だろうか。問う対象は誰か。幻想的な一句であるが、季語が甘き香りの深い金木犀でなく、シツクな銀木犀であるところもまた、一抹の切なさを感じさせるところである。

【山田】 歳をとるということは大変なことである。昨日まで覚えていた道がわからなくなる。私の家はどこですかと聞かれた経験がある方も多いだろう。銀木犀の香りがそんな切ない哀しみをソフトに包み込んでいる。

【田中】 何かの症状が出たのか、自宅が分からなくなった男性。きちんとした身なりで丁寧な物腰であるだけに、茫然として立ち尽くす、その悲しみが増幅して感じられる。「銀木犀」が落ち着いた家並と老紳士を浮かび上がらせている。

【山根】 前書から、認知症や記憶喪失ではないかと心配になった。「銀木犀」「紳士」という慎み深く品のある語が、身なりの整った、丁寧な言葉遣いのご老人の姿を想像させるとともに、事態の深刻さと哀しみを際立たせている。

全体にミステリアスな趣の一句。前書からして、だれがどうして？ と謎めき、中七の「帰る家」を問いかけるそぶりに呼応する。それも、おのれの家なのか、知り合いの家なのか、どこかで縁のあった家なのか。わからない。たたずむのは紳士。いっぱしの人物体を示唆する。しかも銀木犀から白髪を連想させ、相応の年齢とともに、しかるべき社会的地位をもうかがわせる。そんな男性が、帰るべきわが家を見失ったまま、街角に呆然と佇立している。あるいは、銀木犀の家が訪ね当たった屋敷だったにもかかわらず、なぜか案内を乞うことに二の足をふんでいるのか。いや、想い出に胸いっぱいなのか。銀木犀の花の香りが懐かしさをもし出す。

句だけならなんというこのない写生句だが、前書があって、紳士の存在は揺らめき、いまにも物語が立ち上がってきそうな気配を演出する。物語ふうの俳句に秀でた「蕪村」の現代版のよう。お話は読者が想像をめぐらせて楽しめばよい。